

## 雲南省都市部における民族語使用状況 — 少数民族出身大学生の予備調査に基づいて —

宮 本 大 輔

### はじめに

現在、雲南省には、人口5000人を越える定住少数民族が26存在する。つまり、中国に存在する55の少数民族のうち半分以上が雲南省に居住していることになる。彼らの大部分は独自の言語、独自の文化を持っている。だが、普通話<sup>1)</sup>(共通語)の普及に伴い、少数民族の母語保持意識が低下し、一部の民族語<sup>2)</sup>は消滅の危機に瀕している。

中華人民共和国では、成立当初から、その憲法中において、民族語保護をうたっており、民族区域法や各少数民族地域の地方条例などの民族語保護政策も数多く施行されている<sup>3)</sup>。ただ、雲南省の民族語保護政策は未だに完成されておらず、試行錯誤を繰り返している状態で、共通語と民族語の完全なバイリンガル地域、即ち、どちらかがどちらかを浸食することをせず、2つの言語が対等関係を保っている地域はほとんどない。また、今回、調査を行った昆明市では、普通話(共通語)普及が進んでおり、市内に居住する少数民族は、漢族と同化する傾向にある。

本論は、筆者が2005年9月、中国雲南省昆明市において試験的に行った民族語使用状況調査に基づいたものであり、昆明市内における少数民族出身大学生の場面別民族語使用状況を明らかにすることを試みたものである。

## 1. 先行研究

周（1995）によれば、現在の雲南省内の民族言語文字使用状況は、以下の4タイプに分けられる。

- (1) 民族語モノリンガル地域：主に山岳地帯に分布する、人口が比較的多い一つの民族が聚居<sup>4)</sup>している民族自治地方を指す。このタイプの地域では漢族の人口が少数民族よりも少なく、漢族の多くは都市部に居住しているため、少数民族が漢族と接触する機会が少なく、普通話を解する人口は、5～20%しかいない。例えば、怒江リス族自治州、迪慶チベット族自治州、チベット族居住地域及びその他の山岳地域に位置する少数民族の村落がそうである。
- (2) 普通話兼用発展地域：人口が比較的多い一つの民族が聚居している民族自治州・県を指す。このタイプの地域の農村内では、日常生活の主要言語は自民族の言語であり、就学以前の児童はそのほとんどが普通話を解さない。だが、この地域には漢族住民も少なくなく、少数民族が漢族と接触する機会が比較的多いため、普通話を解する人口は20～50%となっている。例えば、徳宏タイ族ジンポー族自治州、紅河ハニ族イ族自治州、滄源ワ族自治県、瀾滄ラフ族自治県などの州や県のタイ族、ジンポー族、ハニ族、ワ族、ラフ族居住地域の大部分がそうである。
- (3) バイリンガル地域：自民族の言語と普通話を併用している地域を指す。この地域は、ほとんどが少数民族と漢族の雑居であり、人口は比較的少ないが、一定の居住区を持つ少数民族の自治地方であるか、或いは、少数民族の聚居区であり、人口も多いが、都市近郊に分布しているために、普通話の影響を強く受けている地域である。少数民族は自民族の村落内や、家庭内においては自民族言語を用いるが、自民族の村落から出たり、他の民族と接触する際には普通話を用いる。このため、この地域では普通話を解する

人口は80%以上となっている。例えば、普洱ハニ族イ族自治県、漾濞イ族自治県、元江ハニ族自治県、新平イ族タイ族自治県、大理ペー族自治州などの州や県のハニ族、タイ族、イ族、ペー族居住地域の大部分、及びその他の自治州・県の民族雑居区がそうである。

- (4) 漢語転用地域及び他民族言語転用地域：母民族言語が既に消滅しているか、或いは部分的地域の母民族言語が消滅し、母民族の群衆が既に完全に或いは部分的に普通話か近隣の他民族言語を転用している地域を指す。

調査を行った昆明は、イ族、回族、漢族、タイ族、チワン族、ハニ族、ペー族、ミャオ族、リス族など26の民族が居住する都市で、上記のどのタイプにも当てはまらない地域だと考えられる。ただ、漢族の人口と少数民族それぞれの人口とを比較すると、やはり漢族の人口が多い。そのため、マイノリティは生活のあらゆる場面において普通話/漢語方言を使用する必要性が生じる。更には、普通話普及も強力に進められているため、ほとんどの少数民族が漢族と同化し、市内の都市部に住む少数民族は普通話転用に向かいつつあると考えられる。この予測の是非を問うのも今回の調査目的の一つである。

楊&趙(2002)によれば、雲南省少数民族地域のバイリンガル教育状況は以下の数タイプに分かれる。

- (1) 二言語単文型：教師はその教学の中で、現地の民族語を補助として、普通話の語彙や、国語(語文)の授業内容を解説する際に用いるという教学形態をさす。だが、異なる言語を話す、異なるマイノリティの学生を有する学校では、教育に使用できる民族語が制限され、マイノリティの学生が逆に民族文字の非識字者となってしまう場合もある。
- (2) 二言語二文型：現在、少数民族が集まっている居住区にある学校の大部分で採用されている教育形態で、その教育方法によって更に以下の3つに分けることができる。

- ① 小学校入学以前に1年間、民族語教育を行い、入学後は漢語文を主体とした教育を行う。教育言語は普通話を主とし、民族語は補助とする。小学3年生以後は、普通話のみを用いた教育を行う。
- ② 1年生の前半は民族語を主体とし、後半から中国語ピンインを学習させ、2年生から二言語二文教育を始め、以後は学年が上がるごとに、民族語の授業を減らし、高学年になると、普通話のみを用い、民族語は補助的に用いるという教育方法。
- ③ 小学校高学年において民族語文を教え、卒業時には学生の民族語レベルを標準レベルにまで向上させる教育方法。

韋家朝&韋盛年(2003)が行った広西防城市キン族三島(万尾, 山心, 巫頭)の住民, 272名を対象としたアンケート調査によれば, キン族の家庭内の言語使用状況は以下の通りである。

表1 キン族の家庭における言語使用状況

	漢語方言	京族語	漢語方言, 京族語	未回答	総人数
家 長	36	61	38	0	135
学 生	36	61	39	1	137
京 族	55	122	76	1	254
非京族	17	0	1	0	18
総 計	72	122	77	1	272

(韋家朝&韋盛年 2003 p.139)

## 2. 調査概要

政府が施行している言語政策は、民族語と普通話のバイリンガルを奨励するという形で少数民族言語を優遇・保護している。その言語政策下では、少数民族が実際、民族語をどの程度保持しているか、また、どの場面において民族語を使用しているか、つまり、その政策の効果がどう現れているかということを議論する必要がある。今回は都市部の民族語使用傾向を明

らかにするために、自記式及び選択式のアンケート調査を行い、様々な場面と使用言語との相関性について、インフォーマントの言語使用状況に基づいて考察する。

## 2.1 調査地点及び調査対象

実施地点と場所：(雲南省昆明市) 雲南民族大学

実施時期：2005年8月29日～9月5日

調査言語：中国語共通語

年齢構成：17～20歳

表2 調査対象民族及び性別構成

	男	女	合計1
イ族	1	8	9
ペー族	3	6	9
ナシ族	1	3	4
ハニ族	1	3	4
タイ族	2	1	3
リス族	0	2	2
アチャン族	1	0	1
ラフ族	0	1	1
ミャオ族	1	0	1
ジンポー族	0	1	1
ヤオ族	0	1	1
プイ族	0	1	1
回族	1	0	1
壮族	0	1	1
漢族	0	1	1
合計2	11 (27.5%)	29 (72.5%)	40

まず、調査実施地点の状況を説明する。調査を行った雲南省昆明市は、26もの少数民族によって構成される民族雑居型都市である。そのため、全てのマイノリティに受け入れられる民族政策を施行するのは非常に難しい。例えば、ほぼ漢族とモンゴル族のみで構成される内モンゴル自治区フフホト市では、行政機関、郵便局、銀行、ホテルなどの看板や道路標識、観光地及び博物館の解説などは、その全てが図1のように普通話と標準モンゴル語を用いた二言語表記となっている。だが、昆明市内において上述したような看板や標識などをフフホト市と同じように普通話と民族語を用いた多言語表記とすることは困難であり、実際に昆明市内では全く見られなかった。

図1 内モンゴル・フフホト市内にある二言語表示の看板



また、昆明市内には、民族小学校は存在せず、民族中学校も一カ所だけである。このため、少数民族が昆明市内に移住してきた場合、その子女は、民族語と普通話の二言語を用いたバイリンガル教育を受けられず、普通話を威信言語とする環境で成長することとなり、母語の保持率は低下すると考えられる。

次に、インフォーマントについてみていく。調査対象は雲南民族大学民族言語文字学部の大学生 40 名である。雲南民族大学民族言語文学学部は、雲南省で唯一、民族語と漢語の両方を用いたバイリンガル教育を行っている学部である。1957年に創立され、当初は、西双版纳タイ語、徳宏州タイ語、ジンポー語、リス語の4つの専攻をもうけていた。そして、現在では、前記の4言語に、イ語、ワ語、ラフ語の3つを加えた6民族7言語の民族語専攻を開設しており、雲南省各地から少数民族及び漢族の学生を幅広く受け入れている。

表2を見ると、インフォーマントの民族構成が、イ族とペー族に偏っている感はあるが、省内に居住する少数民族の人口比率<sup>5)</sup>から考えると、今回のインフォーマントの民族構成は妥当だと見ることもできる。

今回の調査は大学生のみを対象としているため、調査結果も17~20歳という年齢と大学生という教育レベルを反映したものになる。

## 2.2 調査項目

問1~3、問5~6では、学生自身の民族成分、彼らの出身民族の言語、学生自身の言語状況、学生の両親の民族構成を知るために、選択式の質問を設定した。

また、問4では、調査の目的を達成させるために、学生が日常生活において経験するだろう場面を想定し、自記式の質問を設定した。

「以下の場面において、あなたはどの言語を使用しますか。」という質問に、次の7項目の場面を提示し、自記形式でそれぞれ答えてもらった。

場面①：「家庭における会話」（図中では「家で」）

場面②：「校内における同級生との会話」（図中では「同級生と1」）

場面③：「買物」（図中では「買物で」）

場面④：「校外における同級生との会話」（図中では「同級生と2」）

場面⑤：「友達との会話」（図中では「友達と」）

場面⑥：「授業中の先生との会話」（図中では「先生と1」）

場面⑦：「放課後の先生との会話」（図中では「先生と2」）

表3 調査票内容

<p>1. 你是什么族？</p> <p>① 汉族    ② 彝族    ③ 傣族    ④ 纳西族    ⑤ 哈尼族</p> <p>⑥ 白族    ⑦ 壮族    ⑧ 苗族    ⑨ 傈僳族    ⑩ 藏族</p> <p>⑪ 怒族    ⑫ 景颇族    ⑬ 拉祜族    ⑭ 基诺族    ⑮ 其他 _____ 族</p> <p>2. 你的自己民族的语言是什么？</p> <p>① 普通话    ② 民族语言（_____ 语）</p> <p>3. 你会说哪几种语言？</p> <p>① 普通话    ② 彝语    ③ 傣语    ④ 纳西语    ⑤ 哈尼语</p> <p>⑥ 白语    ⑦ 壮语    ⑧ 苗语    ⑨ 傈僳语    ⑩ 藏语</p> <p>⑪ 怒苏语    ⑫ 景颇语    ⑬ 拉祜语    ⑭ 基诺语    ⑮ 其他 _____ 语</p> <p>4. 你在以下情况下使用什么语言？</p> <p>① 在家使用 _____ 语    ② （在学校）跟同学说话使用 _____ 语</p> <p>③ 购物使用 _____ 语    ④ （在校外）跟同学说话使用 _____ 语</p> <p>⑤ 跟朋友聊天儿使用 _____ 语</p> <p>⑥ （课堂上）跟老师说话使用 _____ 语</p> <p>⑦ （下课后）跟老师说话使用 _____ 语</p> <p>5. 你爸爸是什么族？</p> <p>① 汉族    ② 彝族    ③ 傣族    ④ 纳西族    ⑤ 哈尼族</p> <p>⑥ 白族    ⑦ 壮族    ⑧ 苗族    ⑨ 傈僳族    ⑩ 藏族</p> <p>⑪ 怒族    ⑫ 景颇族    ⑬ 拉祜族    ⑭ 基诺族    ⑮ 其他 _____ 族</p> <p>6. 你的妈妈是什么族？</p> <p>① 汉族    ② 彝族    ③ 傣族    ④ 纳西族    ⑤ 哈尼族</p> <p>⑥ 白族    ⑦ 壮族    ⑧ 苗族    ⑨ 傈僳族    ⑩ 藏族</p> <p>⑪ 怒族    ⑫ 景颇族    ⑬ 拉祜族    ⑭ 基诺族    ⑮ 其他 _____ 族</p>
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

### 3. 調査結果と分析

ここでは調査によって明らかになった、学生自身の言語習得状況、場面別民族語使用状況、民族属性差及び両親の民族構成差などについて考察す

る。

### 3.1 言語習得状況

今回の調査では、少数民族の学生が、自民族の言語をどの程度保持しているか、普通話ほどの程度普及しているかを明らかにするのが目的ではあるが、問3の「あなたは、いくつの言語を話せますか」という質問に対して、普通話及び民族語の他に、英語を話すことができると回答した学生がハニ族に2名、イ族に1名、漢族に1名、タイ族に1名、ナシ族に1名、ペー族に1名いた。

表4 学生の言語習得状況

	二言語使用	普通話/漢語方言	合計1
イ族	2 (22.2%)	7 (77.8%)	9
ペー族	7 (77.8%)	2 (22.2%)	9
ナシ族	4 (100%)	0	4
ハニ族	4 (100%)	0	4
タイ族	2 (66.7%)	1 (33.3%)	3
リス族	2 (100%)	0	2
アチャン族	0	1 (100%)	1
ラフ族	0	1 (100%)	1
ミャオ族	1 (100%)	0	1
ジンポー族	0	1 (100%)	1
ヤオ族	0	1 (100%)	1
プイ族	0	1 (100%)	1
回族	0	1 (100%)	1
壮族	0	1 (100%)	1
漢族	0	1 (100%)	1
合計2	22 (55%)	18 (45%)	40

表4の集計結果から、民族語と普通話のバイリンガルが全体の55%を占めることが分かる。また、イ族は9名中7名が普通話/漢語方言<sup>6)</sup>しか話すことができない。イ族は、雲南省で人口が最も多いマイノリティであり、全体的にみると、民族語モノリンガル及びバイリンガルが多く、民族語保持率も高く、言語活力<sup>7)</sup>も二級で母語保持型<sup>8)</sup>(宮本, 2004)に属するのだが、昆明市郊外によくみられるようなイ族自治州においては、イ族が漢族と同化する傾向にあり、今日では、そのほとんどが漢語に転用している<sup>9)</sup>。表4のデータはこの事実をよく反映していると考えられる。

ペー族は、9名中7名がペー語と普通話のバイリンガルである。ペー族のほとんどが居住する大理ペー族自治州は、先行研究で示した周(1995)がいうところのバイリンガル地域に属しているため、民族語保持率は比較的高い。言語活力は三級だが、普通話への転用比率は低く、民族語と普通話のバイリンガルが54.35%<sup>10)</sup>と高くなっている。

また、民族語と普通話のバイリンガルでありながら、場面①～⑦の全てにおいて民族語ではなく、普通話/漢語方言を選択する者が、ハニ族に2名、ナシ族に1名、ペー族に1名見られる。

### 3.2 場面別民族語使用状況

今回の調査で、民族語を用いる場面として学生が選択したのは、場面①、④、⑤の3つである。その他の場面においては、全員が普通話/漢語方言を選択している。

表5の集計結果より、やはり少数民族の学生は、場面①「家庭における会話」、④「校外における同級生との会話」、⑤「友達との会話」といった比較的にリラックスした状態の場面で限定コード(restricted code)<sup>11)</sup>としての民族語を使い、場面②「校内における同級生との会話」、③「買物」、⑥「授業中の先生との会話」、⑦「放課後の先生との会話」といった比較的緊張感を伴う場面では、精密コード(elaborated code)<sup>12)</sup>としての普通話へとコード・スイッチング(code-switching)<sup>13)</sup>する傾向にある。これは、

昆明が26もの少数民族と漢族の多民族雑居型都市であるため、日常生活の各場面における威信言語が普通話/漢語方言となっていることに起因するものと考えられる。

表5 場面別言語使用状況

	少数民族語	普通話/漢語方言	合計
場面①「家で」	18 (45%)	22 (55%)	40
場面②「同級生と1」	0	40 (100%)	40
場面③「買物で」	0	40 (100%)	40
場面④「同級生と2」	1 (2.5%)	39 (97.5%)	40
場面⑤「友達と」	5 (12.5%)	35 (87.5%)	40
場面⑥「先生と1」	0	40 (100%)	40
場面⑦「先生と2」	0	40 (100%)	40

表6 場面別民族語使用状況

	場面① 「家で」	場面② 「同級生と1」	場面③ 「買物で」	場面④ 「同級生と2」	場面⑤ 「友達と」	場面⑥ 「先生と1」	場面⑦ 「先生と2」	バイリンガ ルの人数
ペー族	6(85.7%)	0	0	1(14.3%)	5(71.4%)	0	0	7
ナシ族	3(75%)	0	0	0	0	0	0	4
リス族	2(50%)	0	0	0	0	0	0	4
ハニ族	2(50%)	0	0	0	0	0	0	4
イ族	2(100%)	0	0	0	0	0	0	2
タイ族	2(100%)	0	0	0	0	0	0	2
ミャオ族	1(100%)	0	0	0	0	0	0	1
アチャン族	0	0	0	0	0	0	0	0
ラフ族	0	0	0	0	0	0	0	0
ジンポー族	0	0	0	0	0	0	0	0
ヤオ族	0	0	0	0	0	0	0	0
プイ族	0	0	0	0	0	0	0	0
回族	0	0	0	0	0	0	0	0
壮族	0	0	0	0	0	0	0	0
漢族	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	18	0	0	1	5	0	0	24

イ族のバイリンガルの人数は9名中2名と少なかったが、2名とも、場面①において民族語を選択している。その他の場面においては、民族語ではなく、普通話/漢語方言を選択している。

ナシ族は、4名全員がバイリンガルであり、その内の3名(75%)が場面①において民族語を選択している。残りの1名(25%)は、バイリンガルでありながら、いずれの場面に於いても普通話を選択しており、日常生活の中に民族語を使用する機会はないことが分かる。

リス族は2名全員がバイリンガルであり、場面①で民族語を選択している。だが、その他の場面においては、民族語ではなく、普通話/漢語方言を選択している。

ペー族は、9名中7名がバイリンガルだが、場面①では6名(85.7%)、場面④では1名(14.3%)、場面⑤では5名(71.4%)が、民族語を選択している。バイリンガルだと回答した7名のうち1名は、場面①～⑦のいずれにおいても、普通話/漢語方言を選択しており、日常生活において民族語を使用する機会はないと考えられる。

ハニ族は、4名全員がバイリンガルだと回答しているが、そのうち2名は、いずれの場面においても民族語ではなく、普通話/漢語方言を選択している。

アチャン、ラフ、ミャオ、ジンポー、ヤオ、プイ、回、チワン、漢族のインフォーマントは、それぞれ1名しかおらず、彼らの場面別民族語使用状況の結果には、蓋然的要素が多分に含まれていると考えられるため、ここでは分析対象から除外する。

### 3.3 両親の民族構成

ここでは、今回の調査表、問5、6で調査した学生の両親の民族構成に基づいた考察を試みる。両親の民族構成を以下のように5タイプに分けた。

S(父)×S(母)型：父親と母親が同じマイノリティである家庭。

S(父)×S'(母)型：父親と母親が異なるマイノリティである家庭。

S(父)×H(母)型：父親が少数民族で、母親が漢族の家庭。

H(父)×S(母)型：父親が漢族で、母親が少数民族の家庭。

H(父)×H(母)型：父親と母親が共に漢族である家庭。

表7 両親の民族構成差

	場面①「家で」		場面②「同級生と1」		場面③「買い物で」		場面④「同級生と2」	
	民族語	普通話	民族語	普通話	民族語	普通話	民族語	普通話
S×S(20名)	12(60%)	8(40%)	0	20(100%)	0	20(100%)	1(5%)	19(95%)
S×S'(3名)	0	3(100%)	0	3(100%)	0	3(100%)	0	3(100%)
S×H(6名)	4(66.7%)	2(33.3%)	0	6(100%)	0	6(100%)	0	6(100%)
H×S(10名)	2(20%)	8(80%)	0	10(100%)	0	10(100%)	0	10(100%)
H×H(1名)	0	1(100%)	0	1(100%)	0	1(100%)	0	1(100%)
	場面⑤「友達と」		場面⑥「先生と1」		場面⑦「先生と2」			
	民族語	普通話	民族語	普通話	民族語	普通話		
S×S(20名)	3(15%)	17(85%)	0	20(100%)	0	20(100%)		
S×S'(3名)	0	3(100%)	0	3(100%)	0	3(100%)		
S×H(6名)	1(16.7%)	5(83.3%)	0	6(100%)	0	6(100%)		
H×S(10名)	1(10%)	9(90%)	0	10(100%)	0	10(100%)		
H×H(1名)	0	1(100%)	0	1(100%)	0	1(100%)		

表7の集計結果から民族語使用状況について以下のような特徴を読み取ることができる。

- (1) S×S型は、20名中13名がバイリンガルであり、更にその内12名が場面①において民族語を選択しているなど、他のタイプと比較するとその民族語使用率は、S×Hと共に高くなっている。また、場面④、⑤においても民族語を用いている者が若干名見られる。その他の状況においては、普通話或いは現地の漢語方言を用いて

いる。

- (2) S×S'型は、3名いたが、場面①～⑦のどの場面においても、民族語を選択することはなく、普通話或いは現地の漢語方言を使用している。これは、異なる少数民族で結婚した場合、家庭内での威信言語は普通話となり、結果、その子女は普通話しか話すことができなくなるためだと考えられる。ただ、1名、ハニ族の父親とイ族の母親をもつハニ族の学生だけは、場面①～⑦のどの場面でも、民族語を選択してはいないが、民族語を話すことができるバイリンガルだった。
- (3) S×H型は、6名中4名が場面①において、民族語を選択している。その内1名は場面⑤においても民族語を選択している。場面①における民族語使用率（66.7%）は(4)H×Sタイプの20%と比較すると明らかに高い。
- (4) H×S型は、10名中2名が場面①において、民族語を選択している。その内1名は場面⑤において民族語を選択している。民族語使用率について、(3)S×Hタイプと比べるとどうしても見劣りするの、やはり父方の母語が優位に立ちやすいということを示しているのだろうか。家庭内での言語威信と父母の立場が言語選択に与える影響の一端がかいま見えた。
- (5) H×H型は、1名のみで、①～⑦のどの場面においても、民族語を選択することはなく、全ての場合において普通話或いは現地の漢語方言を選択している。

今回、調査を行った昆明市は、漢族と少数民族の雑居区であり、更に現地の威信言語が普通話及び漢語方言であったために、このような結果になったものと考えられる。

## 4. 結論

ここまで昆明市内における調査結果を分析したところ、次のような特徴が見られた。

- (1) ほぼモンゴル族と漢族のみで形成されるフフホト市では、日常的に見られた二言語表示の看板や標識などが、昆明市内ではまったく見られなかった。これは、26ものマイノリティが雑居する昆明市において、全てのマイノリティに受け入れられる民族政策を施行するのは非常に難しいという事実を表す事例の一つだと思われる。
- (2) 表5からは、マイノリティの学生が、場面①、④、⑤といった比較的リラックスした場面で限定コードである民族語を使用し、場面②、③、⑥、⑦といった比較的緊張感が伴う場面では精密コードである普通話にコード・スイッチングする傾向にあることが読み取れる。
- (3) 表6から分かるように、民族語と普通話のバイリンガルでありながら、筆者が設定した①～⑦のどの場面においても民族語を選択しないマイノリティが、ハニ族に2名、ナシ族に1名、ペー族に1名見られる。
- (4) 表7からは、S×H型とH×S型の場面別民族語使用状況から、家庭内における言語威信と父母の立場が言語選択に及ぼす影響の一端をかいま見ることができる。

漢族との雑居、同化が進む昆明市においては、普通話が彼らの威信言語となっており、日常生活の様々な場面において、青少年が民族語を使用する比率は低下する傾向にあると考えられる。この様な状況を鑑みるに、中国政府が施行している民族語保護政策を都市部においていかに機能させるのかが、重要な課題になるのではないかと考える。

最後に、本調査はインフォーマントが40名と少なかったこともあり、統計学的角度から見ると、量的に不足している感を否めないが、少なくとも雲南省都市部における民族語の場面別使用状況に関しては、その一端をうかがい知ることができたのではないだろうか。

#### 注

- 1) 普通話：1956年2月に国務院が公布した『關於推广普通話的指示』において、正式に以下のように規定された。「①北京語音を標準音とする、②北方方言を基礎方言とする、③典型的な現代白話著作を文法規範とする。」(漢語大詞典 1990 5-777)
- 2) 一部の少数民族の母語使用人口は非常に少ない。例えば、満語：500人、ショー語：955人、ホジェン語：220人。ここでの母語使用人口にはバイリンガルも含めている。なお、統計データは夏国俊(2003)による。
- 3) 中国の言語政策の具体的な内容については、宮本(2005)を参照のこと。
- 4) 聚居：一カ所に集まって居住すること。
- 5) 雲南省内の少数民族人口比率：中国社会科学院民族研究所&国家民族事務委員会文化宣伝司(1994)によれば、イ族：335.49万人、ペー族：112.1万人、ハニ族：105.84万人、チワン族：88.81万人、タイ族：83.97万人、ミャオ族：75.22万人、リス族：46.69万人、回族：43.88万人、ラフ族：30.4万人、ナシ族23.64万人、ヤオ族：14.72万人、ジンポー族：9.29万人、アチャン族：2.04万人、プイ族：4721人となっている。
- 6) 漢語方言：ここでは西南官話を指す。
- 7) 言語活力：各マイノリティ言語が法律・経済・メディア・教育といった分野において、どれほどしようされているのか、ということの数値化しその点数の高低によって言語の活力を三段階に分けたものである。一級に属する言語の言語活力が最も強い。詳しい算出方法については、G.D. McConnel and J-D. Gendron (1993) "International Atlas of Language Vitality (China)" (黄行 2000 より転載)を参照のこと。
- 8) 母語保持型：一つのマイノリティの言語転用人口がその民族総人口の15%以下を占め、かつ言語活力が強い言語を指す(宮本 2004)。
- 9) 雲南省民族語言委員・熊玉有(2005)口述。
- 10) 数値は夏国俊(2003)による。
- 11) 限定コード(restricted code)：くだけた場面で使用される。語彙の選択範囲が狭く、使用される統語構造も複雑ではなく、限定されている。(田中春美 & 田中幸子 1996 43-44)

- 12) 精密コード (elaborated code) : 一般にあらたまった場面で使用される。語彙や統語構造の選択範囲が広いため、複雑で抽象度の高い事柄でも表現でき、状況や文脈への依存度が低い。(田中春美&田中幸子 1996 43)
- 13) コード・スイッチング : ここでは、バイリンガルが場面によって、より適切なコード(言語)へと切り替えることを指す。

## 参考文献

- Bradley, David 1998 *Minority Language Policy and Endangered Languages in China and Southeast Asia*, in Kazuto Matsumura (Edi), *Studies in Endangered Languages*. ひつじ書房
- Bradley, David 2002a *Language Attitudes: the key factor in language maintenance*, in Osahito Miyaoka (Edi) *Lectures on Endangered Languages: 2 form Kyoto Conference 2000 ELPR 151 - 160* (自分たちの言語をどう見るか - 言語維持のための主要因, 宮岡伯人・崎山理編 / 渡辺己・笹山史子監訳 消滅の危機に瀕した世界の言語 118 - 133 2002年 明石書店)
- Bradley, David & Bradley, Maya 2002 *Language Policy and Language Maintenance: Yi in China*, in David Bradley & Maya David (Edi), *Language Endangerment and Language Maintenance: An Active Approach*. Routledge-Curzon
- 藤井(宮西)久美子 2003 近代中国における言語政策 - 文字改革を中心に 三元社
- Golla, Victor 2002 言語が生きる残るとはどういうことか - 小言語の(そう単純ではない) 将来についての考察, 宮岡伯人・崎山理編 / 渡辺己・笹山史子監訳 消滅の危機に瀕した世界の言語 134 - 145 明石書店
- 桂傑&馮菌 2004 中国幾十種語言處於瀕危狀態 中国青年報2月16日
- 漢語大詞典編輯委員会&漢語大詞典編纂所 1990 漢語大詞典(第五卷) 漢語大詞典出版社
- 和麗峰主編 1999 雲南少数民族文字概要 雲南民族出版社
- 黄行 2000 中国少数民族語言活力研究 中央民族大学出版社
- 金光旭 2003 中国における少数民族言語の使用に対する法的保障, 桂木隆夫編『ことばと共生 - 言語の多様性と市民社会の課題』
- 金龍哲編訳 1998 中国少数民族教育政策文献集 大学教育出版
- 林燾 2000 普通話和北京話 語文出版社
- 呂必松 1999 語言教育問題論文集 華語教学出版社
- 宮本大輔 2004 中国における危機言語問題 - 言語転用が招く言語の死 -, 『言語と文化』第11号 113 - 131 2004年12月(神奈川大学大学院外国語学研究科)

- 宮本大輔 2005 言語危機からみる中国の共通語政策, 『人文研究』 vol. 156 旺文社
- 岡本雅享 1999 中国の少数民族教育と言語政策 社会評論社
- 彭国躍 2005 中国の言語政策とイデオロギー—「文字革命」の発生と挫折, 『言語』 vol. 34 No. 3 76-85
- 孫宏開 2001 關於瀕危語言問題 《語言教育与研究》 第1期 1-7
- 孫若窮主編 1990 中国少数民族教育学概論 中国労働出版社
- 田中美春&田中幸子編著 1996 社会言語学への招待—社会・文化・コミュニケーション— ミネルヴァ書房
- 王柯 2005 多民族国家 中国 岩波新書
- 章家朝&章盛年 2003 京族語言使用与教育狀況調查報告 《中央民族大学学報(哲学社会科学版)》 第3期 138-142
- 夏国俊主編 2003 民族教育改革創新管理与評價 寧夏音像出版社
- 許嘉璐&陳章太主編 1999 語言文字学及其応用研究 広東教育出版社
- 楊光遠&趙岩社 2002 雲南少数民族語言文字概論 雲南民族出版社
- 于根元 1996 二十世紀的中国語言応用研究 書海出版社
- 中国社会科学院民族研究所&国家民族事務委員会文化宣伝司主編 1994 中国少数民族語言使用情況 中国蔵学出版社
- 中華人民共和国 2001 中華人民共和国国家通用語言文字法 中国法制出版社
- 周輝文 1995 中国少数民族語文使用研究 中国社会科学出版社
- 周慶生 2000 語言与人類 中央民族大学出版社
- 鄒嘉彦&遊汝傑編 2001 漢語与華人社会 復旦大学出版社 香港城市大学出版社